

論文内容の要旨

| | | | |
|---|---|----|-------------|
| 専攻名 | 多文化社会学 専攻 | 氏名 | LUO XIAOYUN |
| 題名 | 中国の大学での日本語学習者の「言いさし文」の使用状況に関する研究 —日本人学生との対照を通して— | | |
| <p>論文内容の要旨</p> <p>日本人は日常生活の会話では「言いさし文」を多用している。日本語学習者は接続助詞で終わる文は正しくないと考える可能性が高い。しかし、日本語母語話者は会話の中で「お願いがあるんだけど。」のような文は自然だと考えている。本研究は、中国の大学で日本語を勉強する学生を調査対象として、ロールプレーでの調査を行い、様々な場面で「言いさし文」の使用状況を分析し、日本人学生との対照を通して、使用の相違を明らかにした。中国における日本語教育及び日中異文化理解教育において、この相違を活用することによって、異文化コミュニケーション能力の育成に寄与することが期待される。</p> <p>本研究は全7節から構成される。</p> <p>第1節では、本研究の目的、研究対象、研究方法、研究意義などについて述べた。</p> <p>第2節では、先行研究をまとめた。「言いさし」に関する研究、「言いさし文」の定義、「言いさし」の機能、学習者の「言いさし」の習得に分類して概観した後、本研究の立場を明らかにした。先行研究にロールプレーを用いた中国人日本語学習者の「言いさし」の習得の研究がほとんどなかったため、本研究はロールプレーの調査方法を使用した。</p> <p>第3節以降は本論である。第3節では調査方法について、場面設定、録音、文字化、「言いさし文」の基準などを述べた。本研究では、ロールプレーという方法を用い、その会話を録音し、文字化した。日本語学習者には、日本語会話能力が高くないために、会話の中で非常に長い沈黙時間が見られた。従って、文字化した会話の文末に「、」と「。」のどちらを付けるかは調査対象の日本語学習者自身に判断を委ね、付けてもらった。</p> | | | |

| | |
|--|-------------|
| 氏 名 | LUO XIAOYUN |
| <p>第4節は調査の結果である。日本語母語話者、日本語学習者のN2組、N1組の全員の様々な場面での「言いさし文」の使用回数を集計した。その結果、日本語学習者は日本語母語話者より、「言いさし文」の使用回数は少なかった。</p> <p>第5節においては、調査結果を分析した。結果について、場面ごとの分析と助詞ごとの分析を行った。場面ごとの分析として、日本語母語話者は依頼場面での「言いさし文」の使用回数が最も多かった。それに対して、日本語学習者は断り場面での「言いさし文」の使用回数が最も多かった。日本語母語話者は依頼場面、誘い場面、断り場面以外の、その他の場面での「言いさし文」の使用回数が最も少なかったが、日本語学習者では誘い場面での「言いさし文」の使用回数が最も少なかった。助詞ごとの分析については、日本語母語話者は「けど」、「から」「たら」を使用していたが、日本語学習者は「けど」、「が」、「から」、「ので」、「たら」、「れば」を使用していた。</p> <p>第6節は考察である。第4節の結果と第5節の分析に基づき、本研究は日本語教科書での「言いさし文」の教え方、「ポライトネス」の観点から被調査者の使用相違を考察した。</p> <p>第7節では本研究のまとめ、本研究の不足点と今後の課題について述べた。</p> <p>本研究では、先行研究を踏まえた上で、主として日本語母語話者と日本語学習者の対照分析の観点から、「言いさし文」の使用状況を明らかにした。またその結果に基づき、中国の大学で日本語を勉強する学生の「言いさし文」の使用における問題点を究明した。さらに、調査の結果を基に、具体的な使用例を挙げながら、日本語母語話者との対照を行い、日本語学習者が日本語母語話者と同様に「言いさし文」が使用できるようになるための提案を行った。本研究の結果が中国における日本語教育及び異文化理解教育に役立てれば、幸いである。</p> | |